

---

# 甘くて苦い少女たち

戸塚夢葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

甘くて苦い少女たち

### 【Zコード】

Z6464Z

### 【作者名】

戸塚夢葉

### 【あらすじ】

普通の学園生活を望む、霧谷和也。しかし、その周りの女子のせいで現実以上の甘い日々を送ることになる。和也の事が好きになつてしまふ人が増え、和也は誰と付き合つのか？

いつも通りの日々…………のはずが！？

## 高校入学して1ヶ月。

ここまで普通の人生

オレ、霧谷和也の人生はここから桃色、否、黒色に変わつていつた。他の、思春期の高校生ならこれを見て羨ましがるだろう。

人の気も知らないで と思う  
オレは、普通の暮らしがしたい。

「金持ちでもなく、貧乏でもなく、じぐじぐ普通の  
人間でもなく、ただただ先の話だが……。  
「今日も生きていられるかな……。」

高校生の発する言葉じゃない」とは十分わかる。

「今日も、朝っぱらから無駄に元気の多いことだ」

言ひ聞門が廻り少しうるが  
べふつゝと仕ひだ。

心と叫した

「さうが、無駄とほど一ゆ事！？無駄とほ！」

死んで生き返れ

今日も生きて、いられますように

地面に這いずりながら神様に願う。

そもそも、可愛い顔してこんなことを言つなんて、外見と内面の差がありすぎる。そのことを知つてゐるオレは、この幼馴染の少女、柏木優奈に對して、恐ろしい、怖いなどの黒い感情を抱く。しかし、

この内面を知らない馬鹿共は、可愛い、好きなビトコツ命知りずの感情を抱く。

学校に間に合うために少し早歩きをする。

オレが通っている、帝都学園では俺らは付き合っていふところになっていた。必死に説明してようやく、噂が收まり、普通の学園生活を送れそうだ。

あのときは酷かった。オレも被害者なのに、殴るビトコツか蹴られてしまった。死ぬかと思つたよ。

一緒に登校は、なんか普通つて感じ。

幼馴染だから、別になんとも思わないし。

今日は、一緒に登校はしてない。なぜなら、つつき殴られ、地面を這いずつてる間に行つてしまつたからだ。校門を過ぎ、教室に入った。

ここにまた悪夢が訪れる。

いつも通りの日々・・・・のはずが！？

ガラガラガラとドアを開けると、目の前に汚い泣き崩れた顔が近づいてくる。

「おわつ！なんだなんだ！？」

そう言ったのが聞こえたのかどうかわからなかつた。

「和也ー」

泣きながらオレの名前を呼ぶ。

こいつは、鈴木祐樹。

オレの数少ない親友だ。

なにしろ、学園のアイドルらしい優奈と仲がよく幼馴染という位置のオレは恨まれることのほう多かつた。

祐樹の場合、ネットの中で生きているので嫉妬心といつのは微塵もなかつた。

その祐樹が泣き崩れている。特に珍しくもないが一応聞いてみた。

「どうしたんだよ？まずは鼻を拭け」

そう言ってハンカチを渡した。このハンカチは一度と使えないな・・・

それから少しして、口を開いてくれた。

「朝にね、お前の幼馴染の柏木に、『オイ！お前の彼氏の和也君はどうしたのかなあ？』って言つた瞬間に顔面にね、拳が飛んできたの」

「どうか、自業自得だ。

助ける気など埃の様に去つた。

その直後、後ろから鬼を纏つた少女が来た。  
もちろん星奈である。

「アンタ、こいつにビーカーしつけしてんのよッ！ちよつといいわ。  
アンタら一人とも・・・」

言い終える前に俺たちは教室から出て行つた。

もちろん、速攻で捕まりボコボコに . . . . 朝から体力が消えた。

当分、星奈の怒りは消えそうにない。

そして、また祐樹が命知らずな事を言つた。

「アイツのスカートの中盗撮してくる」

知らんぞ、とだけ言つて祐樹を見送つた。

見たいわけじゃないよ?いや、思春期だし . . . . 見たいかなあ

そんなことを考えているうちに、祐樹が携帯を取り出す。

机の陰に隠れ、シャッター音を鳴らす。

バカだな . . . .

光と音出てるよ。

当然、その直後に祐樹はボコボコ。

享年十五歳。

ご愁傷様で。

それだけならよかつた。

優奈がオレのほうに向かつてくる。

「ゆ、優奈 . . . . ?」

聞こえともせず、腹にフック、顎にアッパーそしてどどめに踵落とし。

死亡時刻 午前八時二十五分。

それから、オレは気を失い、気づいたら保健室のベッドの上だつた。

「お目覚めですか?」

傍から優しい声が聞こえた。

誰だろう?

起き上がつて見ると、そこには黒い髪の綺麗な人がいた。

いつも通りの日々…………のはずが！？

起き上がるとそこには黒い髪で長くストレートの女子がいた。

「ここはどこだ？」

辺りを見回しているオレに声をかけてくれた。

「保健室ですよ。大丈夫？」

心配されていた。

そういえばオレは、優奈に殴られ気絶して……つてことははずつとここに！？

「あの、今何時……ですか？」

ふふつ、つと笑つてその子が答えてくれた。

「もう4時ですよ」

にこにこしながら答えた。

4時……つてオレは朝からずっと寝てたのか！？

情けねーと思いながら、起き上がる。

そして、今更だがオレを手当してくれた人にお礼を言った。

「あの、ありがとうございました。失礼ですけどお名前は……？」

にこやかのまま答えられた。

「私は、櫻井紫苑。2・3です。」

へえー2年なのかあーとオレは言った。

「に、2年！？」

驚いたオレはすぐさま謝った。

「すみません！2年生とは知らず、失礼を……」

「いいんですよ。すぐに言わなかつた私にも非はあります

なんていい人なんだ。星奈とは大違ひだ。

にしても、情けない。

女の攻撃で約8時間も気絶するとは……

今すぐ、家に帰ろう。

「あの、ありがとうございました。帰ります」

「おひがして、保健室を出た。

お大事に、と紫苑先輩は言つてくれた。

優しすぎる先輩、この出会い方はまさに2次元世界……！  
若干、興奮したがすぐに溜息とともに消え去った。

校門の前に優奈が立つていた。

「遅い！ いつまで待たせるつもり！？」  
顔を赤くして後ろを向きそう言つた。

「お前がそうしたんだろ」

地雷を踏んだ。

「アンタが弱すぎんのよ……！」

やばい、と思つてすぐに謝りお礼を言つた。

「悪かつたよ。でも待つてくれてありがとう  
ん？ 優奈が耳の後ろまで赤くなつてるぞ？  
女というものはよくわからない。

「そ、そんなことより！ 早く行きましょ！ バイトしなきゃ  
そう、オレの家はパン屋だつた。

一見、地味そうに見えるがかなり難しい。

わけあつて、優奈がバイトとして手伝つてくれてるのだ。  
店の名前は、「ベーカリー・ブレッド」

なんか、めちゃくちゃだつた。

そりやそうだ。だつてオレの姉貴が付けたんだもん。

店の前に着きドアを開けると、いきなり視界に巨乳が……

「遅かったな」

いきなり目の前に現れた。

「おわっ！」

「おわっ！ とは何だ！ 人の顔を見るなり！」

そういうわけじゃないよ姉さん。いきなり現れたからしじうがない  
つて。

「おお！優奈君。来てたのか。入りたまえ  
お邪魔します、と言つて優奈が入つた。

いつも通りの田々・・・・のはずが！？

黒くて長く真っ直ぐな髪。男勝りな口調、性格、そして……この巨乳。間違いなくオレの姉さん霧谷遙だ。これだけはいつも変わらないのでほつとす。

姉さんはパンを焼くことだけは一流だが、この店の名前せいで随分損をしている。しかし、変えるつもりは毛頭ないらしく、仕方なく今まで続けている。

「何をしてたのだ？ いつもならもっと早い筈だ。」

どうやらオレ達が遅いことに腹を立ててるらしい。そんなことを考えているうちに優奈が口を開いた。

「ずっと氣絶してたんですよ」

はあー、と溜息をつきながら言った。

「あれは、お前が悪いんだろ！」

優奈は赤くなりさらにもう一回反論していく。

「アンタが弱いんでしょ！」

「お前が強すぎんだよ！ このゴコリ！ …！」

ゴコリとこう単語を聞いたとき、一瞬にしてオレの急所に膝蹴りが

・

「ぐはあつ！」

本日3度目の死の危険性。

そして、お決まりの巨乳。

「死んで生き返れ」

冷酷無比な奴だ。

もめていたオレ達を、姉さんが止めてくれた。

「まあまあ、よさないか。仲がいいのはわかったから。まるで夫婦みたいだな」

この一言がさらにオレを突き落とす。

ふふっ、と笑つてどこかへ去つていってしまった。

「そ、そ、そ、そそそ、そんなんじゃないです……」

「顔が真っ赤になりながら、俺に向かつて拳を振るひ。

何故だ……オレは悪くないのに。

なんとか生き返り、やつとバイトを始められる。

「遙姉さん。そろそろ店やばいよ? ずっと赤字で倒産すんぜんだよ」  
そう、現に優奈のバイト代でさえ払えていなかつた。いつでもいい  
とは言ってくれているがさすがに申し訳ない。

最近では、パンの種類が同じだから客が減り姉さん曰く「や優奈曰  
当ての客ばかり来る。それでおまけに買つていく」という感じで少  
しだけ売れる。

それだけだから当然赤字だつた。

「ふむ……なら新商品を開発するか」

おおつ、とオレは反射的に言つた。ここまで真剣になつてくれたの  
は久しぶりだ。ついこないだまで、ずっと家でネットしかしてなか  
つたから。姉さんはネットオタクだ。だから祐樹とも気が合ひ。  
ずっと黙り込んでいた優奈がやつと口を開いた。

「季節の商品を入れたほうが売れると思うわよ」  
さすが、優奈といつとこひだり。真剣に考えてくれてるだけでも  
ありがたい。

「では、新商品を今月中に最低3個作る。一人1個アイデアを持つ  
て來い。」

新商品についての会議が終わり、いつも作るパンに取り掛かつた。

いつも通りの日々・・・・のはずが！？

午前9時55分。

やっと作業が終った。

パン作るなんて1週間ぶりくらいでこれからはしっかり作ろうと思  
う。でないと、姉さんはネットゲーのために店まで閉めかねないか  
らだ。

姉さんの人生はゲームとパンでできている気がする。誰か見張り役  
がほしい。そろそろ眞面目に店がやばいのだ。

「いい姉さん。これからはしっかりとパンを作つてね？経営やばい  
んだから。じゃないと・・・・・・・・ゲーム禁止にするよ」

これ効いたのかどうか、姉さんの表情が変わった。

「貴様、私のゲームを取り上げるつもりか？そんなことをしてみる。  
した瞬間貴様の首を・・・・」

言い終える前に「はいはい」と言つて優奈が流してくれた。完全厨  
二病だよ姉さん。

「でも、ちゃんと姉さんが考えて経営が安定すれば、ゲーム買える  
よ？」

この一言でかなりやる気出した。嬉しい反面悲しくもある。情けな  
い。

「見ていろ。私が本気になれば経営なんてすぐ右肩上がりだ」

「期待してるよ姉さん」

そう言つて、今日の仕事は終了。もう一〇時を過ぎていた。

「優奈。もう遅いから送るよ」

「えつ、いいわよ別に一平気に決まつてんじやん！」

そこまでして強がらなくても。

「じゃ、外出でみれば？」

言われたとおりに優奈が外へ出る。

辺りは一面真つ暗だった。

かなり優奈が震えていた。だから言つたの。』

「ほらな。行くぞ」

それでも、素直にならないのか、まだ平氣と言つている。

「だだ、大丈夫よ！で、でも折角だから一緒に行つてやるわよ！」

素直じやない奴。オレは苦笑しながら出た。

夜の道は慣れているがさすがに怖かつた。いつも以上に暗いし、自転車のブレーキ音にも少しビクつとする。優奈はそれ以上の反応をする。

店から優奈の家までは、約15分ほどで着く。

5分程歩いたところで優奈が寄つてきて、手を組んできた。

「なつ、何してんだよ . . .

いくら幼馴染とはいえ、オレは思春期まつじぐらの高校生。これでドキドキしないほうがおかしい。

「しようがないでしょ . . . . 惡いんだから

よほど、辛いのだろうな。あの、悪魔で巨乳美人（といつても遙姉さんほどじやないが）の優奈が怖がるとは。一応、人間らしい。手を組んでからどれほど歩いたのだろうか。優奈は、すてすてと早く歩く。

「ゆ、優奈。もう家過ぎてるぞ」

気づいたら優奈の家より500㍍くらいに進んでいた。「知つてゐるわよ！」と黙つて戻る。

家の前に送つたところで、オレは帰ろうとする。しつかりと優奈が玄関の前のドアを越えるまで見送る。ドアを開け、こっちを向いて、「ありがとね . . . 送つてくれて」と黙つてすぐドアを閉めてしまつた。素直なところもあるんじゃないかな。

オレも家帰つて寝よつ。

姉さんのゲームもほどほどにさせなきや。

## いつも通りの日々・・・・のはずが！？

いつも通りの朝。窓から朝日が流れ込む。いい朝だ、と思ったかった。だが、衝撃の事件が起きた。

それは . . . . .

オレが姉さんに起こされた事だ。

は？と思う人もいるかもしねないけどこんな事初めてだ。

起こすなら毎日だけど、起こされるなんて . . .

「オイ！起きろ！」と言いながらフライパンとおたまでガンガンやられては起きるしかない。

朝起きて、テーブルに着くとすぐしつかりした朝ごはんが用意されていた。しかも、毎朝オレが用意するのが今日は姉さんが用意してくれた。感激して涙が出そうだ。

さらに、今まで見たこともないパンが用意されている。

「姉さん、これは？」

「うん」と、ふつふつふと笑いをあげた。

「これは、昨日徹夜で考えた新作だ。見ろ！徹夜だからクマができるクマが！」

と言つて、強調されても困るんだけどなあ

でも、以前の姉さんからは信じられない行動だ。どんだけゲーム欲しかつたんだろ？

用意された新作のパンは5個。正直、朝ごはんとしてはかなり多いがせつからだから食べよう。

まず、パンダの顔をしたパンを食べた。中に生クリームとクリームが入つていてかなりおいしい。餡子が入つたものもある。

さらに、具がかなりあるピザパンも作っていた。一見普通だが、味は一流。その他にもいろいろおいしいのがあり、全て商品化することにした。

こんなに、おいしいパンを作ってくれてとても嬉しい。今まで、こ

んなに真面目にやつたことはなかつたのに。

「どうだ？ うまいか？」

心配そうに聞いてきた。

「おこしょ！ 本当におこしょ！ 全部商品化しちゃおう！」

遙姉さんの顔が満面の笑顔になり、巨乳に顔を押し付けてきた。

「ぐ、苦しいー。死んじやうよ遙姉さん……」

「おつーすまんすまん」と言つて放してくれた。もう少し押し付けられてても良かつたかななんて。

問題はあと一つ。

どうやってこれを、アピールするかだ。いくらおいしくても存在がわからなければ買つ人はいない。そこで、ＨＰを作成したり、町にチラシを配つたりして存在を見せ付けた。

そのおかげで、とんでもないほど売れて今となつては毎日客がたくさん来る。以前のように、姉さんや優奈が当てで来る人は少なくなつたのが嬉しい。

かなり売れたので、今では経営も安泰だ。やつと右肩上がりした。だが、覚えていたのか「新作の、モンスターファンタジー・プラネットを買つてこい」と言われた。だから、店の金は増えてもオレの財布はすっからかんだ。あんな約束しなければよかつた。

だけど、そのおかげで姉さんが真面目に取り組んでくれた。それだつたら安いものだ。

まあ、こんなんで気づいたらもう夏だった。

いつも通りの日々・・・・のはずが！？

夏休み。それは普通の高校生なら遊んだり、部活で過ごすだらう。オレみたいに家業をする高校生はどうほどいるのだろうか。別に嫌ではない。むしろ楽しい。だけど、さすがにオレでも遊びたいと思うときはある。せめて、一日だけでも皆と楽しく過ごしたい。それを、思い切って姉さんに伝えてみた。

「いいよ」の一言で終つた。

「えつ？ 店はどうするの？」

「そんなの私に任せときな。高校生は遊べ」  
驚いた。まさかこんなに簡単に了承してもらえるとは。でも、姉さんが仕事してオレが遊ぶのは何か申し訳ない気がする。ん？まさか、遙姉さんはこの気にゲームする気じゃ。。。

顔がめつちやニヤけていた。。。

「姉さん！ ゲームはほどほどにね！」

わかつてるよ、と言つて自分の部屋へ去つていつた。  
オレも学校へ行こう。

教室に入ると、「和也君！」と言つ声が聞こえた。

「なんだよ。また優奈か・・・？」

振り返ると、茶色いショートヘアの女の子が立つていた。少なくとも優奈ではなくこの人物は優奈の親友の川崎恵がいた。

「なんだ。恵か。何か用か？」

恵は、ちょっと顔を赤くして言つた。

「あの、・・・その、・・・」

こんな感じで沈黙のまま。

そこに、優奈が現れた。

「早く言つちやいなさいよ

優奈は一やけながら言つ。

「和也君は夏休み空いてるかな？」

驚いた。これが運命と言つやつか。さつき、休みをゲットしてすぐ  
に用事ができるとは。

「少しだつたら空いてるよ」

「じゃ、その……海にでも行かない？」

海？これはヤバいだろ……オレは思春期だぞ。女の水着なんて  
見たら……

この考え方を見通したのか、優奈がこう言つた。

「恵一人で行かせるわけにはいかないわ。私も行くから  
別に着いていきたいわけじゃないんだからねッ、と付け足してね。

そこへ後ろから、祐樹が現れた。

「お前も行きたいくせに」

「ば、ばか、んなこと言つたら……」

「死んで生き返つてまた死ね！……！」

踵落しがキレイに決まる。

やつぱりこうなると思つたよ……

地面に這いずりながら祐樹が言つた。

「オレ達も行くぞ……」

そう言つたら、体つきのいい男が出てきた。

「俺たちも暇でな。男三人というのもアレだしな」  
もうオレは入つてることになつてゐるのか。

この男は、笹川大輔。

空手と柔道を嗜む、武道男だ。

でも、心は優しくてオレの親友もある。

「ちょっとアンタ達！勝手に決めないでよねーー！」

そんな怒ることでもないだろに……

「なあ、コイツらも一緒にダメか？男一人つてのもアレだしさ」  
そう言つたら恵も共感してくれた。

「そうだよ！人数多いほうが楽しいし！」

二人に言われ、仕方なくと言つ感じだが優奈もOKした。しかし、優奈は、

「でもさ、男3人女2人よ？これじゃ人数合わないじゃない」

誰か、誘えそうな人を考えてみる。

頭に浮かんだのは紫苑先輩だった。

あれから、何度かお礼に行き今では結構仲がいい。それに、あの人は後輩から慕われている最高の先輩だった。

「もう一人はさ、先輩でもいいのか？」

この言葉に、優奈と恵は驚いた。

「誰なのよ！」

「紫苑先輩」

もつと驚かれた。というより仲がいいことに驚かれた。

「コイツはついに先輩にまで手を出すか。この裏切り者オ！」

この一言から、優奈がキレてオレのほうに寄る。

「和也————！」

「ち、違うって今のは祐樹の嘘で……」

なんて言つてゐるうちに優奈のパンチで吹つ飛ぶ。

「まあ、許してやつてくれ。祐樹は和也に嫉妬しているのだ  
してね——よ！」と祐樹は言つがな。

いつも通りの日々・・・・のはずが！？

オレは、放課後保健室へ向かった。

「ここにちは桜井先輩」オレはどうしても本人の前だと苗字で呼んでしまう。

「紫苑でいいですよ」

にこりとしながら言つてくれた。

「は、はい！紫苑先輩」

ちょつと真面目そうな顔になり、オレに質問をしてきた。

「今日はどうしたのですか？何か悪いところでも？」

「いえ。まだこの間のお礼をしてませんし、もしよろしければ夏休みに海へ行きませんか？」

紫苑先輩の顔が晴れ晴れとした。

「まあ！嬉しいです！ぜひ行きたいです！」

よかつた、と思つていたらいきなり紫苑先輩が顔を近づけてきた。

「せ、先輩・・・？」

な、な、なんだこりや————！危険、危険すぎ————！

顔と顔の距離がもうほとんどない。このままキス・・・・と思つていた。これ、どう見ても現実じゃねー、ゲームかゲーム？いや、

夢？やばい、落ち着けー落ち着け。

「くまたん」

「くまたん？」

オレの制服のピンを指差して言つた。

制服のピンがこれしかなくてくまのやつを付けている。

いきなり紫苑先輩が抱きついてきた。

「ちょっと！先輩！落ち着いてください！..」

しかし、何を言つても「くまたんだあー」としか返つてこなかつた。

こんなところを誰かに見られたら . . .  
そう思っていたらいきなりドアが開いた。  
優奈が入ってきました。

沈黙が流れ、優奈はふるふる震えている。

「こ、この馬鹿和也ーーー死んで生き返って死んで生き返って死  
んじゃえーーー！」

何発もパンチされオレは氣を失った。

起きてから事情を説明し、何とか納得してもらえた。だけど、「紛  
らわしいのよ！」と若干まだ怒っている。  
そして紫苑先輩は極度のくま好きらしい。くまを見るともう一人の  
自分が出るとかどうとか . . .  
まあ、なんだかんだで一件落着。

## いつも通りの日々・・・・のはずが！？

行くのは、オレ、祐樹、大輔、優奈、恵 紫苑先輩の6人だと思つていた。しかし、結局的には紫苑先輩が2年生一人というのはちょっと、という事なので紫苑先輩の同級生の零条茜先輩も来ることになつた。しかも、その茜先輩は紫苑先輩と正反対の性格の持ち主で、超明るくかなり男っぽい感じの人だつた。まあ、男勝りなら遙姉さんも負けてないけど。

行く場所は、沖縄まで行くこととなつた。ちょっと遠いし大変そつだが、楽しめればいいや。行く前に、優奈にはバイト代を渡しておいた。中々貰つてはくれなかつたが、姉さんの恐怖により貰つてくれた。最近は客も安定してるのでこしくらいなら贅沢をしても平氣だ。だけど、あまり贅沢する氣には慣れなかつた。姉さんが待つてゐるから。

そして夏休み前日。

「明日から沖縄かあ～5日間の旅！あつちで限定ファイギュア買いまくつてやるぜ！」

祐樹の声が廊下に響き渡る。オレは他人のふりをした。

「そんなもの秋原葉行けば買えるだろう

大輔の言つてゐることは正しい。けど「秋原葉」じゃなくて「秋葉原」な・・・。

一方、優奈は、かなり張り切つてゐた。和也と近づけるチャンスなんてめつたにないんだから。

そして、二人きりでラブラブになんて考えていた。

「でも、恵も和也のこと好きなのよね・・・」

ライバル出現は正直親友とはいえ切なかつた。それに、協力すると言つてしまつたから協力しなければならない。じつは、自分自身の素直じやないとこを責める。

恵のほうも複雑な心境だった。

絶対、優奈は和也君のこと好き。そう思っていた。なのに、わかっているのに協力してなんて言ってしまった自分が恥ずかしいし最低だ。

「私、最低だなあ . . . 」

言わなきや、と優奈と恵はどっちも思っていた。自分の気持ちをはつきり伝えて堂々と戦う。それが大事なのに、中々言い出せなかつた。

放課後の帰り道、優奈と恵は偶然出会った。

「「あのね！話があるの」「

思いつきり被つた。一人ともはいビーぞ、と言つたがどっちも言わない。

「は、早く恵からいいなさいよ

「優奈から言つてよ」「

こんな感じのやり取りで30分経過。

もう埒があかないと思ったのか優奈から口を開いた。

「あ、あのね、こないだ . . . 協力するつて言つたでしょ？私、和

也のこと好きだからできない！ホント『ごめんなさい！』

でも、友達でいて欲しい、と泣きながら優奈は言った。

「当たり前でしょ。わかってるよ和也君の事好きなのは。こっちこそわかつて言つたんだ。最低だよね。こっちこそ『ごめんなさい』

「いいの悪いのは私のほうだから！」

「ううん！悪いのは私

「私つて言つてんでしょ！」

「うるさい！悪いのは私なの！！」

そこに偶然通りかかったオレは一人の口げんかを見つけて、「オイ、やめる！」と言つたら「「うるさい！……」」と口をそろえ言われ、二人の強烈なパンチを食らつた。

オレが何をしたんだ . . . 。

優奈と恵は、ライバルであり親友であり。

二人とも、笑顔で帰つていつた。  
オレだけ、苦しそうだが……。  
。

いつも通りの田々・・・・のはずが！？

時は遡り、場所は保健室。

中にいるのは紫苑と茜。

「紫苑が認めるなんて、そつとつ面白い子なんだあ～」  
茜が笑いながら言つた。

「うん。すこく優しくて面白いよ。」

じーっと茜が紫苑を見つめ、聞いてみる。

「もしかして、紫苑つてその和也つて子好きなんじゃないのー？」  
すると一瞬で顔が赤くなり、動搖する。

「ななな、何言つてるのーそもそも、そんな事・・・」

あははは、と笑う茜。

「やつぱりね～分かっちゃつたあ～」

「内緒にしてよ・・・・」

わかつてるつて、つと言つて肩を思いつきり叩いた。

「でも、そんないい子ならアタシがとつちやおうかな」  
それ聞いた瞬間に、紫苑が立ち上がり、

「絶対ダメ！～！～！許さない！～！」

「やっぱ、好きなんだあ～可愛いねえ～」

〔冗談とこいつことに気づいて本気になつた自分が恥ずかしい。〕

## 飛行機で和也の争奪戦！？

今から、5日間旅行だ。待ちに待つた旅行である。「えっと、財布はあるし、着替えもある。カメラもある。まあOKだろ！」

遙姉さんはずっとネットゲーで遊んでいた。オレは溜息をつきながら、「いい姉さん？ ちゃんと店舗して、ゲームはほどほどにね？」

「わかつていい……お十産待つてるが」

姉さんはPCから田話をさずに言つた。

しかし、いきなり立ち上がり、筆筒をゴンゴンあさりだした。取り出したのは、デジカメだった。

「私へのお土産に、和也たちが楽しく遊んでいる姿を写真に撮ってきてほしい。それが私の一番の思い出となるからな」姉さんは顔を赤らめて言つた。

「わかつた。最高の写真を用意するから……！」

「ああ。行つてこい」

行つてきます、と言つて家を出た。バス停まで10分程度歩き、何回か乗り返して空港まで向かう。時間も全然余裕があつた。空港に着き、待ち合わせ場所まで向かう。すると、まだ時間より30分以上早いのに茜先輩がいた。

「おはようございます。早いですね先輩」「

にこりと笑つて、「おはよ！ いや～時間間違えたりやつてひあ～」それにしても誰も来ない。一人で氣まずい空気が漂つ。さすがに耐えられなくなつたオレは、茜先輩に聞いてみた。

「先輩、朝飯食べました？」

そつしたら、うつとつとつてお腹がなつた。

「1Jの時間じやど1Jもやつてないです。ウチのパンでよければ食べますか？」

「うん……食べる食べる」

オレは鞄から取り出し、茜先輩に渡した。

食べてみると「おーしー」と何回も言つてくれた。

「それ、オレの姉さんが作つてくれたんですよ。」

茜先輩は驚いたように顔を上げた。

「へえ～お姉さんいるんだあ～そうとつまいまい人なんでしょう～」

オレは苦笑しながら答える。

「ええまあ。普段はゲームばつかやつてるんですけどね。でも、や

る時はやるし、信頼できる姉さんですよ。」

「お姉さんのこと大切にしてるんだね」

オレは、少し黙つたがこう言つた。

「たつた一人の……家族ですから」

## 飛行機で和也の争奪戦！？

何を言つてゐんだオレは . . .

「たつた一人の家族？」

茜先輩が聞いてきた。

「ええ。オレが小学生の頃親が他界しました。交通事故で。それ以来姉さんと二人で生きてきたんです。姉さんは、あれ以来泣かなくなつた。それどころか強くなろうとした。オレの為に . . .」

少し茜先輩は悲しそうな顔をした。これ以上言つるのは止めておこう。  
「すみません。楽しい旅行前に言つ話じやなかつたですね。忘れてください」

「ううん。いいんだよ。でも今は辛くないでしょ？みんながいるんだし」

いつも通りの笑顔を見せてくれた。

「ええ、もちろんです！」

気づくともう約束の時間に近づいていた。すると、皆が来た。

「やつほおー！」

茜先輩が大きく手を振る。皆は小さく手を振つた。

「おはよつ。和也君」

恵が顔を赤くしながら言つた。今日の恵は服が派手で、少し化粧もしている感じだった。

「ど、どうかな？似合つ？」

もう顔がかなり赤いよ。なんだかオレまで顔が赤くなる。

「う、うん。すつじい似合つてるよ」

恵は顔を赤くしたまま微笑んだ。

紫苑先輩が若干不機嫌そうだった。紫苑先輩は白いワンピースに麦藁帽子。こちらもかなり可愛い。

「お、おはよつ！やいます。紫苑先輩。ええと、その . . .す、ぐく似合つてますよ」

紫苑先輩まで顔を赤くして、にこやかな笑顔を見せてくれた。そし  
て、今度は恵が「うー」と表情を見せる。

それよりも優奈がまだ来てないことに気づいた。あの優奈が遅刻なんてめずらしい。何かあつたんじやないかと心配する。

「優奈はまだ着てないのか?」

「大便でもしてんじゃねーの?」

祐樹が笑いながら言った。  
すると後ろから祐樹の頭にラリアットが飛ぶ。

「誰がするか！」

優奈が着た。ゼーハー言つてるよ···走つたんだな。

それはしても、今日の優奈は、可愛らしかった。  
幼馬染て、悪魔の性格を差し引いても可愛い。

「遅れてスミマセン！」

すると西先輩が口を開いた。

「ちゅうとあうちやん！遅いよー！」でも、その格好からして、和也君にどんな服見せるか迷つたんでしょう

すると優奈がかなり動搖し

•

「バス一本で行けるぞ」

大輔が口を開いた。確かに、道に迷つたといつのはうそだろう。

「アカハラ第1で西たぐはに置く」

オレに聞くのか . . . えっとどうしよう。

「肌の露出が多いですね？」

「二回死んで来るやうだ！」

5mくらい吹っ飛ばされた。沖縄に行く前から、重症だ。  
やつと飛行機に乗れる。

そう思っていた。

だけど、思いもがけない事が起こった。

それは

・

・

・

## 飛行機で和也の争奪戦！？

飛行機に乗り、出発までまだかなり時間があった。

なにやら、女3人がもめてるぞ？

優奈、恵、紫苑先輩がもめていた。

どうやら座席でもめていたらしい。

「どこ座つてもいいじゃん早く座りなよ」

一斉に、オレの方を向いて

「「「うるさい！！！」」

と言われた。さすがに3人から言わると怖エー  
さらにわかったのがオレの隣に座るのが誰かということらしい。  
すると後ろから祐樹が声をかけてきた。

「オイ！お前だけ3次元を堪能しやがって！変われコラ！..」

知つたことが、と思つたが、

「お前は2次元で生きてるんだろ？」

これには何も言えまい。ふつ、オレの勝ちだ。

大輔の隣には、茜先輩が座つている。どうやら3人に気を遣つたら  
しい。

「恵があそこの席に座ればいいでしょ！」

指定したのは祐樹の隣。

「無理だよ！あんなところ！私は和也君の隣に座るの！」

「和也君の隣は私のものです。誰にも渡しません」

大声でもめているので他の乗客から睨まれた。

他人のふり、他人のふりつと。

そんなことを気にしない乙女三人組は未だもめ続けている。

一方、祐樹は自分の隣が拒否されたので自分の鞄からアニメ雑誌を取り出し2次元ワールドへ行つた。沖縄までには戻つてこいよ。

大輔は精神統一をしている、と思つたが寝ていた。

茜先輩はゲームに熱中。オラ！クソッとか言う声を出している。姉

さんと少し似ていた。

出発まであと、30分くらいあつた。

乗客口から黒いスーツを着た男たちが入ってくる。

10人程度の連中だつた。

「今からこの飛行機は我々が支配する！ 抵抗すれば殺す

乗客全員が凍りついた。

## 飛行機で和也の争奪戦！？

人生でハイジャックなんてありえないと思つていた。  
が、現に今起きている。

全員が銃を取り出した。

どうやら本当にハイジャックされたらしい。

一人ほど、外へ出た。

どうやら、出発までに邪魔者が来ないよう見張りをするといつと  
ころだらう。

大輔はこの期に及んでも寝ている。いつのときだけ羨ましいよ。  
いつもまつむせこくらいに明るい茜先輩もさすがに静かになつてい  
る。

祐樹は、雑誌で顔を隠している。情けないと思いたいがこれが普通  
の反応なのだらう。

黒い連中がごそごそと話している。

「おい、そこの3人来い」

銃を向けているため素直に従う。

するどリーダー的な存在の男が、

「あー、こいつら人質ね。何かしたら一人ずつ殺すから

後ろの男たちが下種な笑い声を上げる。

オレは足がすくんで何もできない。

自分の無力感を感じ、情けなさに死にたいと思つた。

悔しくて、悔しくて自分を責めた。

すっかり優奈たちは青ざめている。無理もない . . .

オレの頭の中に姉さんの声が響いた。

- 勇気を出せ！絶対に逃げるな。

昔、姉さんに言われたことがある。

そうだ、オレがやるしかないんだ。

オレは立つて、男たちの元へ向かう。

「何だてめえ」

「人質ならオレがなる。だから3人は解放してください」  
後ろの男たちが、どうする?と聞いていた。頼む!

リーダーがオレの前に立ち、

「駄目だね!お前なんか意味ないからな  
オレは無意識にリーダーを殴っていた。

部下数名が後ろから撃とうとしてきた。だが、

「ウオラア!!」

大輔が一瞬にして気絶させた。

「お前だけいいところは与えん」

だけど、五人で銃を構えられた。もう終わりか、畜生 . . .  
だけど、終わりじゃなかつた。見張りがやられて誰かが入つてくる。

「貴様ら、誰に手を出しているんだ?」

長くて黒くてストレートな髪。この巨乳。男勝りな性格。

遙姉さんだつた。

遙姉さんは男を全滅させた。

数分後、警察が来て男たちを逮捕した。

「でも何で姉さんが来てるの?」

「うむ。伝言を忘れていた。ゲーム+攻略本で

それだけ . . . ?

まあ、来てくれて助かつた。

優奈たちが解放され、恵が一番で抱きついてきた。

「怖かったよお

泣いていた。

オレは、そつと包み込むように抱きしめた。

## 飛行機で和也の争奪戦！？

騒ぎは収まつたものの、優奈たちはすっかり青ざめている。無理もない。命の危険性があつたのだから。

オレたちは、最悪のスタートを切つた。

これから、楽しめるのだろうか。

恵は、ずっと泣いているし、紫苑先輩は俯いている。優奈は普段と変わらないような表情を作つていて、明らかに無理をしている。どうにか、元気にしてやりたい。慰めてもまり意味がなかつた。結局、座席はオレ、祐樹、大輔の順で座つた。そして遠くはなれて前に優奈たちが座つている。

茜先輩は、ずっと慰め、元気付けようとしている。自分だつて、かなり怖いはずなのに。心から尊敬するし、茜先輩の強さを知つた。「どうにかして優奈たちを元気付けられないかな・・・せつかくの沖縄をここまま終らせるなんてつまらない。どうにか思い出に残したい」

「でも、どうする？あんなことあつたら普通すぐには立ち直れないぞ」

普段ふざけている祐樹がここでは真面目に言つてている。こんな感じで、ずっと考えていた。元気付ける方法を。しばらく沈黙が流れた後、大輔がいきなり、

「そうだ！」

と、大声を発した。

周りの乗客からの視線が集まる。前の優奈でさえ、振り返つた。

大輔は、小さい声で「すいません」と言つて身を縮めた。

「で？何か言い案でも見つかつたか？」

俺は待ちきれなくて聞いた。

「沖縄には、この時期ある時間にだけ見られる海があるそつだ。それは大変絶景らしい」

それだ！とオレと祐樹は顔をあわせた。だけど、祐樹はすぐに難しい顔をしてしまった。

「どうした？」

オレが聞いてみると、手を顎につけたまま、「その絶景つてのはどこにあるんだ？場所わかつてなくちゃ意味ないし、時間とかもわかるのか？」

そうだ . . .

時間とかがわからなければ意味がない。いくら沖縄とはいえ広いのだから。

だけど、大輔はいきなり笑い出し、

「ちょっと待て、これを使えば一発で . . .

鞄をあさりだし、中から携帯を取り出した。

「これで、検索すれば出てくるだろう。ふふふ、最新のスマホだぞ」最新のスマホをとんでもないほど早く使いこなす。とても武術を嗜んでいいるとは思えない。

こいつこんなところだけ現代人なんだよなあ . . .

大輔が検索してから数分後、やつと口を開いた。

「だめだ。時間はわかつたものの場所までは出てこない」

少しがつかりしたが、時間がわかつただけよかつた。

「何時から見れるんだ？その海は」

「夕方の4時50分、5時00分の十分間だけだ」

オレは時計を見ると、もう昼近くになつっていた。

「場所がわかんないんじゃ . . .

祐樹が言つた。

「わかんないなら自力で探すまでだ！」

## 沖縄の絶景・皆の想い

沖縄に到着してから一時間。

手がかりゼロ。

「海なんてどこも同じじゃないのか?」

独り言を言つても当然返つてこない。

オレは到着してからすぐに、用事があると言つてこいつにきた。  
まさか沖縄に着てまで絶景探しをするとは . . . . .  
でも、皆の為ならいくらでもしよう。

今、この絶景を探してるのは男3人だ。

でも、茜先輩には教えた。

見つけたら連れてきてもらうために。

「もしもし? 祐樹? なんか手がかりあつたか?」

この会話を30分おきにしていた。

でも返つてくる返事は同じ。

「なんも」

大輔にかけても同じだつた。

「まだ見つかってはおらん」

これしか言つてこなかつた。

オレは、現地の人たちに聞き込みをする。

もう30人近くの人に聞くが、「知らない」「聞いたことがない」としか言われなかつた。

このまま海の近くにいても意味がないのでオレは町の資料館などの施設に行くことにした。

いろいろ聞き込んで早3時間。

一向に手がかりはなかつた。

するとオレのズボンのポケットから振動が伝わる。

電話が掛かってきた。

「もしもし？」

見たことのない番号だった。

「あーもしもし？ 和也君？ アタシー茜だよー」

第一声田でわかりましたよ。

「そつちはどう？」

「すみません。まだ何も . . . .

茜先輩はちょっと黙つたが、

「そつかあ。あんま無理しないでね？」

心配してくれたのがありがたかった。

「はい。そつちはどうですか？ 優奈たちは . . . .

ちょっと溜息をついて、

「つーん。皆バラバラで散歩行っちゃった。やつぱ、相当元気ない

よ . . . .

この一言がオレをも元気なくした。

現状を説明され、急がなければと思った。

思つたより時間が早く感じる。

「わかりました。ありがとうございます。何かあつたらまた連絡しますので」

うん、と言つて電話が切れた。

もう時間は4時を回っていた。

いくら調べても、何の手がかりもない。

「本当にあるのかよ . . . . .」

もう30人以上の人間に聞き込みをしたが、誰も「知らない」「聞いたことない」としか答えられなくて、あるのがどうかさえ疑わしい現状だった。

祐樹と大輔も同じで、まったく情報はなかつた。

オレは、無意識に海へと向かつていた。

今、海は、夕日が差し込みとても美しかつた。これ以上美しい海なんてあるのかと思うほどに。

「これじゃないのか . . . . .?」

だけど、何か違つ氣がする。この海のことだったら誰でも知つていいはずだ。

やはり、ずっと歩いたり調べたりしていると心身ともに疲れがくる。オレは、溜息しか吐いていなかつた。

やる気を出させるために、頬を両手でバチンッと叩く。痛かつたけど、優奈たちが味わつた痛みはこんなものじゃない筈だ、と自分に言い聞かせて再開する。だけど、もう時間はあまりなかつた。

もう少し調べよう、と思って1時間、2時間と時間が過ぎていく。辺りはすっかり薄暗くなつてしまつた。時計は7時を回つていて。すると、まだ遠くだが船がこちらに戻つてくるのが見えた。  
「ここでラストだな . . . . .」

船は遠くで気づかなかつたが、近くに来るとかなりの大型でここなら情報があるかもしないと希望を抱く。中から一人の青年が出てきて、オレに気づいたようで「どうした少年?」と声をかけてくれた。

「あの、沖縄の海に絶景が見られると聞いたんですけど、何か知りませんか？」

うーん、と言つたが「すまないがわからないな」と言つてしまつた。  
「そうですか．．．．．．ありがとうございました」

ちょっと待つてくれ！と呼び止められた。

「オレはまだ沖縄で漁を始めたばかりなんだ。だからオレはわからないけど先輩達ならわかるかもしれない」

オレの心にまた希望の光が一筋差した。

「本当にですか！？お願いします！」

「おう！じゃあ、ついてきな！」

オレが連れて行かれたのは、倉庫のような場所で中はかなり広かつた。たくさんの漁師がなにやら仕事をしている。中に入ると、潮のにおいが鼻を刺した。

入つたとき、視線を感じたが青年が事情を説明してくれた。

「僕は、沖縄の絶景を探しています！海にあると聞いたんですけど何かご存知ありませんか？」

倉庫に響き渡るようだ大声で言つた。だけど、返つてくる返答はやつぱり今までと同じで「知らない」や「わからない」「聞いたことない」というものだつた。

またか．．．．．と思つたが一人、年配のおじさんが「俺は知つてるぜ」と言つてくれた。

「俺知ってるぜ」

この言葉を聞いたとき、嬉しさで飛び上がりそうになつた。

「教えてください！ お願ひします！！」

年配のおじさんは手を前に止めるよじ出した。

「まあ待て。今日はもう遅い。明日またここに来てくれ。そうだな・・・・・10時頃でいいだろ。いいか？」

今日教えてくれないのは不満だが、まあしょうがない。せっかくの手がかりを無駄にするわけにはいかない。ん？ 待てよ・・・・・もう遅いって言つたか？

時計を見ると10時を回つていた。

「わかりました！ ありがとうございます！」

オレはダッシュで帰ることにした。

ホテルに入るとロビーで優奈が怒りの顔をあらわにして待つていた。

「遅い！ どこ行つてたのよ！ ！ ！」

「悪い。道に迷つたんだよ」

優奈の眼差しは真剣すぎて、苦しかつた。でも言つわけにはいかなかつた。

それよりも、優奈がいつも通りでよかつた。心底安心する。

「もうとっくに既寝てるわよ」

そうか、優奈は待つててくれたんだ。

「優奈。ありがとう待つてくれて」

優奈は顔を赤らめて、

「し、心配なんてべ、別にしてないわよ！ あーもうー死んで生き返れーーー！」

思いつきり脇腹にひじを食らわされた。でも、いつも通りでよかつた・・・・・

「そりいえば和也何も食べてないでしょーーー？ これ落ちてたから食べ

なさいよー。」「

落ちてたって……しかもオレの好物ばっかり。作ってくれたんだな。

「わざわざ作ってくれるなんてサンキュー」「

動搖した優奈は、

「作つてない！……落ちてたのよー！」「

はいはい、と部屋に持つていって食べる。

なんか、涙が出そうだった。

優奈が作ってくれた夕食を食べて、ベッドに入った。かなり疲れていたのに、中々眠れなかつた。多分それは、あのおじさんが教えてくれなかつたからだらう。早く10時になつてほしい。

結局、ほとんど眠れず朝を迎えた。まだ6時前後で、しょうがないから外へ出た。

やつぱり、向かうのは海で少しでも早く向かいたかった。辺りはまだ薄暗くて朝の海というのも不気味なものだつた。オレは、昔のこと思い出していた。そう、渚といった。あのときを。

## 10年前の過去・渚との出会い

渚と出会ったのは小学校の入学式。

ショートで青っぽい髪の色をしていたせいもあって他の新入生よりも目立っていた。

一目見たときから、何かに惹かれていた。

渚は小学1年生にはとても見えなかつた。顔立ちもそうだし、性格もとても大人びていた。渚はとにかく喋らなかつた。初めて喋つたのはそう同じクラスになつてから1ヶ月くらいたつたときだつたかな。

オレは昔から一人でいるのが好きで、放課後は屋上で過ごしていた。あまり早く帰ると親に心配かけるから、だから夕方までそこで過ごしていた。過ごしていたと言つても何かしてはいたわけじゃない。何もしないでただただ時間が流れしていくのを待つだけだつた。

オレはいつも通り、屋上に行くと渚がいた。その時、初めて話した気がする。

渚は空を見上げていた。そしてオレは渚の目から一筋の涙が流れたのを覚えている。

渚はオレが来たことに気づくと、涙を拭いて立ち去ろうとした。

「あ、いいよ……ここにいて。オレがどこか行くから」

オレが立ち去ろうとして振り返ると、腕をつかまれた。驚いて振り返ると、渚はただ首を振つていた。

「行くなつて事か？」

渚は頷いた。

オレはこのとき表せないほど嬉しかつた。渚と一緒にいられるのが嬉しかつた。

その日は渚はずつと空を見上げていた。オレも空を見上げていた。でも、時々渚も見ていた。

「ねえ、霧谷くん……」

もう夕暮れ近いときに渚が口を開いた。

「なに？」

「何で、ここにいつもいるの？」

いつも、という語には気になつたけど、オレは、

「友達がいないからかな……ずっと一人だからね。あんま早く帰るとお母さん心配させちゃうから」

この時、渚は切なそうな顔をした。

「そつか……」

しばしの沈黙が流れた後、「もう帰るね」と言つて、帰つてしまつた。

渚と過ごした時間はとても短く感じられた。でも、幸せの時間だつた。入学して以来、必要時以来、初めて他の人と喋った気がする。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6464z/>

---

甘くて苦い少女たち

2011年12月28日22時50分発行